

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

24 武田泰淳『史記』の世界

■目標 京大（や東大）が好きそうなテキストに挑もう。ちよつとエッセイみたいで、文学、芸術がらみのテキスト。

■追跡

① ことに「項羽本紀」は、「高祖本紀」と並べて読み合わせるようにできていることが、他の「本紀」と異なっている。項羽が世界の中心となり、その次に高祖が世界の中心になったというより、項羽と高祖が二人で、「世界の中心」をかたちづくっているように見える。この二人の強者が力のかぎり争いあう姿が、そのまま世界の中心をなしているように思われる。二つの物理的な力が作用しあう一つの宇宙的な「場」のようなものがあり、読んでいてハラハラするほど、そこからすばらしいエネルギーを発散する。「項羽本紀」と「高祖本紀」は読解問題1たてに時間的につながっているのではなく、よこに空間的につながっている。もうここまでくると「本紀」の読み方も多少変えなければならぬ。「本紀」の重点は項羽個人にあるばかりではない。高祖にばかり負わされているのではない。項羽と高祖という対立する要素の運動に重点があるのである。項羽がなければ、「高祖本紀」もない。対立しあう他の個人がなければ、その個人は価値がなくなってしまう。ここで問題になっているのは、王と臣下の関係ではない。世界の中心と、その周囲の政治的人物との関係でもない。中心と中心との関係、絶対者と絶対者の関係である。根本的に対立した二人の個人の間である。そしてその関係を探求することが、いつか「本紀」の内容を深めていくのである。「世界の中心」が二つ現れた場合、一つ空間を二つの人間物質が占めようと運動した場合である。「項羽本紀」からは、「本紀」は立体的となり、中心そのものの運動がその内容となる。個人の運命ではなく、中心をつくりなす人間の連関が問題にされている。「世界の中心」を立体的に眺め、その運動の法則をとりあつかうことにより、個人の性格が歴史的に如何に重要なものであるかが、はっきりと示されてくるのである。「怒り」や「笑い」や「勇気」や「焦躁」や「智慧」や、そうした個人的な感情、倫理、能力の一つ一つが歴史の絵模様面にあざやかに浮き出してくるのは、まさにこの時である。

高祖とは、漢王朝を立てた劉邦。「鴻門の会」では、「沛公」だった。「沛公」と「項羽（項王）」。「項羽本紀」は、項羽が主人公だが、「高祖本紀」は沛公と劉邦が主人公。同じ事件が、両側から描かれる。鴻門の会、四面楚歌、学んだことを思い出しつつ読もう。

読解問題1 「たてに時間的につながっているのではなく、よこに空間的につながっている」とはどのようなことか。

直接的には、「項羽が世界の中心となり、その次に高祖が世界の中心になったというより、項羽と高祖が二人で、「世界の中心」をかたちづくっている」に対応する。最も簡単な答えは、

「項羽本紀」と「高祖本紀」は、まず項羽が世界の中心となり、その次に高祖が世界の中心になったという時間の順番でつながっているのではなく、項羽と高祖が二人で同時に、同じ空間の中で「世界の中心」をかたちづくっていることを示している、ということ。前半はいいとして、後半は、もっと深めたい。

ここでいう「世界の中心」とはどんなあり方なのかというと、「この二人の強者が力のかぎり争いあう姿が、そのまま世界の中心をなしている」「中心と中心との関係、絶対者と絶対者の関係である。根本的に対立した二人の個人の間である」

といったところに見られるように、「根本的に対立した二人の強者が、力のかぎり争いあう姿が、そのまま世界の中心を形作っている」というあり方である。

【解答例】「項羽本紀」と「高祖本紀」は、まず項羽が世界の中心となり、その次に高祖が世界の中心になったという時間の順番でつながっているのではなく、項羽と高祖という根本的に対立した二人の強者が、力のかぎり一つの中心を争いあう姿が、そのまま世界の中心を形作るような場を構成している、ということ。

② ここで司馬遷の小説家らしい構成上の装置、つまり仕掛けについて二、三のべておこう。

③ 「項羽本紀」には次のような一節がある。「秦の始皇帝が会稽山へ行こうとして錢塘江を渡った時、項梁は項羽と一緒にそれを見物した。その時項羽が『あいつにかわって天下を取ってやるぞ。』と口ばしたので、項梁は彼の口をふさいで『乱暴なことをいうな。一家みなごろしにされるぞ。』といましめた。」

武田泰淳（たけだたいじゅん）は戦後を代表する作家のひとり。中国の文学に詳しくかつた。作家ならではの観点が示される。

④ この一節は項羽の気宇の大きさと単純率直さをよく示している。これは、「世界の中心」をながめて、「世界の中心」がこう言ったという物語で、実に大きな内容を持った一節である。ところがこれによく似たことが「高祖本紀」のはじめにも記録されている。

⑤ 「高祖はかつて咸陽で労役に服していた。その時、秦の皇帝を見物して思わず嘆息してつぶやいた。『ああ、男子たるものあのようにならなくてはならぬ。』」

これも名高い話。司馬遷は、あえて二人を対比する書き方をする。

⑥ この一節も高祖の氣宇の大きさを物語るものであるが、項羽の言葉とはおのずから異なっている。粗暴で烈火のようにもえさかる項羽の気性とちがいが、智略があり計画的なかわりにどこか受け身な高祖の性格がしのばれる。「項羽本紀」と「高祖本紀」の各々に、こうして同じような情景を書きとめておいたのは、司馬遷の工夫である。かつこの世界の中心をなした一人の絶対者に対して、あたらしき世界の中心たらしんとする二人の絶対者が、思わず発した二つの言葉は、**読解問題2** 照らし合わせて津々たる興味がある。

読解問題2 「照らし合わせて津々たる興味がある」のはなぜか。

なぜ、と訊いているが、どこに興味があるか、と問い直そう。答えは、対比が鮮やかなところ、だ。同じ秦の皇帝を見た、という設定の上で対比するから、効果がある。

【解答例1】 同じ秦の皇帝を見た、という設定の上で、二人の漏らした言葉を対比することによって、そこから推察できる二人の性格の対比が鮮やかに感じられるから。

スペースが多く、具体的な内容も入れるなら、

【解答例2】 同じ秦の皇帝を見た、という設定の上で、二人の漏らした、「あいつに取って代わる」「あのようにになりたい」という言葉を対比することによって、そこから推察できる、粗暴で烈火のようにもえさかる項羽の気性と智略があり計画的なかわりにどこか受け身な高祖の性格という、二人の性格の対比が鮮やかに感じられるから。

⑦ 「項羽本紀」には「怒る」という文字がよく出てくる。何かあると項羽は怒る。そして動作を起こすのである。

⑧ 「沛公（高祖）がもう咸陽を陥落させた」と聞き、項羽は大いに怒って、当陽君らに函谷関を攻撃させた。「項羽は大いに怒って言った。『明日、兵士どもに慰労の宴をひらき、沛公の軍を攻撃して打ち破ってやろう。』」項羽は、漢王が漢中の地をことごとく併合し、また東方では斉と趙が叛旗をひるがえしたと聞き、大いに怒って、もとの呉の長官鄭昌を韓王として漢をふせぎ、蕭公角らに彭越をうたせた。「項羽は怒って周苛を煮殺し、また縦公も一緒に殺した。」項羽は怒って高祖の父を殺そうとした。「漢の軍には弓のうまい楼煩という者がいた。楚の兵士が三回も挑戦したが、そのたびに楼煩がこれを射殺した。項羽は大いに怒り、甲をつけ戦をにぎって自分がかけていって挑戦した。楼煩がまたこれを射とうとすると、項羽は目をいからせて怒鳴りつけた。楼煩は眼がくらみ射つこともできなくなり、逃げ返って防壁の後ろにかくれ、二度と出ようとしな。漢王は、あれは誰かときかせると、項羽なので、大いに驚いた。そこで項羽は漢王と面会し、二人で広武の

谷を前にして語り合った。漢王は項羽の非を責めたので、項羽は怒って一戦しようとしたが、漢王はきかなかった。項羽は弩を埋伏させて置き、漢王に命中させた。漢王は負傷して成臯に逃げた。」

⑨ まことに項羽の怒りははげしい。怒りにかりたてられて一生を終わっている。「笑う」などという文字はほとんど見えない。項羽はいよいよ自分が最期をとげる前に一回笑っただけである。

説く者を煮る、というのもあったね。覚えているかな。最後の項羽のニヒルな嗤い。項王笑いていわく、天が自分を滅ぼそうとしているのに、いまさら河を渡っても仕方ない。あれ。

⑩ ところが「高祖本紀」の方には「怒る」という文字がほとんどない。「怒る」という文字がでてきても「怒る」人はみな項羽である。高祖はほとんど怒らない。ただ一回、臣下のものがあまり立派な宮殿をこしらえたのを見て、どうしてこの非常時にこんな馬鹿な真似をするか、と怒っただけである。この一回も陰性で計画的で、雷電のような項羽の怒りとはくらべものにならない。対立する二つの中心の一方が怒ってばかりいるのに、一方はまるで怒らないのである。こうしたところに、司馬遷が色どる歴史画の色彩の不思議な魅力は、無数に見出だすことができる。

色彩の対比。史実を描いてはいるのだが、そこには、司馬遷なりの造形の妙がある。

⑪ さて私は今まで、「本紀」の立体性や空間的なつながりや、また「本紀」で示した司馬遷の装置や仕掛けのことを語ってきたのであるが、これらのことをもっとも端的に示してくれるのは有名な「鴻門の会」である。「鴻門の会」の面白さこそ「本紀」の面白さであり、「鴻門の会」を理解すれば「本紀」は理解しつくされたとも言える。「鴻門の会」では、まず二つの太陽が面会するのである。それだけでも人間宇宙の大異変である。項羽と高祖という「世界の中心」が顔をあわせるのである。しかも一方は他方を殺そうとしているのである。日蝕などというきまりきった現象ではない。どうなるか予測のつかぬ何十年に一回の現象である。その上、その席上には太陽ばかりではなく、遊星も出席している。張良、范増、樊などという運動のはげしい遊星たちである。これこそは歴史的天文学者の、待ちに待った千載一遇の好機ではないか。

鴻門の会は、まさに歴史の転回点。星々の運動と引力と、その加減次第では、世界の軌道は変化する。さあ、どうなる？ って、結末を知ってはいいても、ドキドキするのが歴史ものの魅力。（あくまで史記は歴史書。小説じゃないけど）

⑫ この宇宙的な会合において、やはり読者の眼を惹くのは二つの太陽と多くの遊星たち

の一つ一つの相貌であろう。一刻も早く高祖を殺さしてしまおうとしている范増、何もかも見抜いて方策をつくして高祖を救い出そうとする張良、人を殺すことを何とも思わないのに、その夜だけは殺したがらなかった項羽、項羽の衛士を衝き仆して中へ入り、酒を飲み豚をくらい高祖を守った樊、ただただ張良と樊の力にたより、あやうく難をまぬかれていく高祖、この会合の出場人物の一挙手一投足が、歴史の夜空をキラキラと輝かしている。すべての力がここに集中し、力と力の関係のあらゆる法則がこの一瞬に実験せしめられる。会が始められてから終わるまでのわずかな間に、これらの不可解な天体たちの運動が、一どきに解明されるのである。「鴻門の会」の面白さは「事件」などという、偶然的な時間的な点にはない。必然的な空間的なつながりの面白さ、一つ一つの天体の動きが、大きな宇宙の運動をかたちづくっている、あの整齊な「全体」の面白さである。この面白さは**読解問題3**『史記』の面白さである。司馬遷の歴史の面白さである。人間天文学の面白さである。一人一人の個性、一つ一つの行為が、こうして整齊な「全体」にむすびつけられていくのは、面白いばかりでなく、歴史の「真実らしさ」ともなるのである。『史記』全体のあのゆるがしがたい真実らしさの秘密は、この「鴻門の会」一段にすでに認められる。「本紀」が立体的となり、空間的となることは、真実らしさを増すことである。「項羽本紀」が「鴻門の会」一段を有していることは、「本紀」が立体的であり空間的につながりを持ち、『史記』全体の宇宙的中心をなしていることを証明してあまりある。

読解問題3 『史記』の面白さ」はどのようなことか、まとめなさい。

「真実らしさ」がキーワード。リアルやな、うそっぽくないな、そこが面白さなのだ。答えはそれなので、どうやって、真実らしさが生まれているのかをまとめていけばいい。

形式的に導こう。☆傍線部を延長すれば、

「この面白さは『史記』の面白さである。」

とあるので、「この面白さ」の指示内容をたどる。

「鴻門の会の面白さは「事件」などという、偶然的な時間的な点にはない。」

「必然的な空間的なつながりの面白さ、一つ一つの天体の動きが、大きな宇宙の運動をかたちづくっている、あの整齊な「全体」の面白さである。」

「整齊」は字の通り、整いそろっていること。「大きな宇宙の運動をかたちづくっている、あの整齊な「全体」は、次のようにいいかえられている。

「一人一人の個性、一つ一つの行為が、こうして整齊な「全体」にむすびつけられていく」

「一つ一つの天体の動き」というのが、「一人一人の個性、一つ一つの行為」のことだ。ここで筆者が、「天文」「宇宙」「星」に喩えていることに注目しよう。「天体の動き」は、一つの大きな空間の中で、それぞれがつつまが合うように実現している現象だ。何年も先の日食を予言できるように、一つの空間の中で整合性をもって星々の生成消滅のドラマが展開されている。

史記の描く歴史もまた、作家の筆先一つでどうにでもなるドラマではなく、また、たま

たま起きた事件のつらなりということでもなく、そうでしかなかった必然的な歴史の事実の、紀伝体だから、各登場人物の事実としての動きの、ダイナミックなぶつかり合いのドラマとして描かれている。

【解答例】「史記」の面白さは、「鴻門の会」に最もよく現れている。それは偶然に起きた事件のつながりではない。それぞれ固有の力を持った登場人物たちが、一つ一つの場面で取る一つ一つの行動が、お互いに衝突したり、糾合したり、別の行動を誘発したり、あたかも一つの宇宙空間の中で星と星が、必然的な運動法則に従って生成消滅のドラマを展開するように、一つ一つの行動が、歴史的空間の中で整合性の取れた世界を生み出しているように描かれ、読む者に生き生きしたりアリティイを感じさせるところに、その面白さはある。

このような「まとめ」の問いは、実際の入試でもよく出る。二百字程度を要求する問いも多い。びびらないように(笑) (小論文じゃないから)書くべき要素は、本文にあるので、探せばいい。ただし、①はつきり書かれておらず、比喩的な言い方にとどまっている、②元の叙述の論理性が明確でない、といったところが、たいてい含まれている。まあ、いうてことは伝わるが、もうちょっと、①一般的な言葉で、②みちすじを整えて、書いてよ。それが「まとめ」の問いの意図であることが多い。特に、②みちすじ、をよく練ること。その型は一つではない。そのときに意識すべきなのは、①文末(最後)をどうしめくくるか(問いに端的に対応していないとだめ。この解答例で確かめてもら)、②構文をどう取るか、③文と文のつながり(接続詞など)をどうするか、だ。

(余談) 武田泰淳には「司馬遷」という名高い論考もある。泰淳は小説より、論考がよく引かれる印象がある。泰淳もいいが、おすすめしたいのは、彼の妻の**武田百合子**の作品。エッセーだが、もう、ほんとうに、ゲラゲラ笑いながら、その観察眼、日本語の練り出し方におののく。日本語が読めて、今生きているのに、武田百合子を読んだことがないというのは不幸だ。ほんまに。入試の文章としても、京大や東大が出題してもおかしくない。(北野高校図書館) 武田百合子『富士日記』【915/T1911】『犬が星見た』【915/T1912】 武田泰淳『司馬遷』【920/T43】

■読解問題

- 1 「たてに時間的につながっているのではなく、よこに空間的につながっている」とはどのようなことか。
- 2 「照らし合わせて津々たる興味がある」のはなぜか。
- 3 『史記』の面白さ」はどのようなことか、まとめなさい。

■発展問題

●この文章や教科書に載っている「天道是非か」（史記・伯夷）、さらに、中島敦の小説「李陵」を読み、司馬遷がどうしてこのような描き方を選択したのかについて論じなさい。

●重要語「偶然・必然」⇨偶然と必然は、根底的な主題だ。因果関係がわからないか、わかるか、といった字義の説明がよくなされているが、例えば、天体の運動法則を（知らない）者にとっては、ある現象は偶然に見える。天文学者には必然に見える。認識できるかどうか、という問題がここには「必然的に」含まれる。